
LOVE MYSELF

久住 なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE MYSELF

【Nコード】

N3418A

【作者名】

久住 なつき

【あらすじ】

女たらしで有名だけど女子には人気のある翔。麻奈はそんな翔を初めて振った女の子。翔の友達の耕平は麻奈に恋をした。だけど人の想いや考えは、耕平が思う程単純ではなかった。

一、始まり

”遂に元木翔が振られた”

噂とは早いもので当日には学校中に広まった。

元木翔と言ったらその容姿で女子から人気を集めているが、快く思っていない人の方が多い。

告白してはOKの返事をもらい、一週間後には自分から別れを告げる。そのくり返し。

そんな彼が遂に振られたのだ。男子の喜びようと云ったらまるでお祭り騒ぎだった。

夕礼後、西野耕平はやたらテンションの高い友人に苦笑しながら教室を出た。

（あいつ、男から人気ねえもんな。悪い奴じゃないんだけど）

教室の違う翔の元へ向う。心境は複雑だった。

初めて噂を聞いたときは迷わずからかってやるうと思っていたが、周りのはしゃぎぶりを見るとそれは悪い気がする。

教室を覗き、まだたくさん残っている生徒の中から翔を探す。

翔は一人席に座って考える人のポーズをしていた。

「翔、お前何やってんの？」

声に気付き目を開く。

「ああ耕平くん。見ての通り、考え事。」

乗り突っ込みでもしてやろうかと思ったが、翔が真剣な様子なのでやめておいた。

翔はまた目を閉じた。今話し掛けても会話として成り立たないだろう。

仕方ないので耕平は空いている隣の席に座る。

「なあ、俺って格好良いよね？」

「・・・どうした？」

教室の壁に掛かっている時計の長い針が丁度五回進んだ頃、翔が目を開じたまま話掛けた。

「いやだからさ、俺って男として超格好良いよね。顔美形だし、運動超得意だし？」

「まず人としてその性格はどうかと思うぜ」

翔は確かに同姓から見てもすごく格好良い。問題は本人に自覚がありすぎる事だ。

「俺さ、女の子に振られた事なかったわけ」

「知ってる。しかも自分はすぐに振るんだろ。一体お前の何処がいんだか」

「それはやっぱり超美形の顔でしょ」

翔のナルシストはその通りだから質が悪い。

「俺何で振られたんだろ？」

「（日頃の行い、ナルシな性格。これしかないだろ）・・・マジで分かんねえの？」

本気で悩んでいる翔に今すぐにも教えてやりたかったが、自分で気付かなければ意味がない。耕平は呆れながらも翔の当たる兆しのない予想に付き合った。

「うーん、その子に見る目がなかった」

「違う違う。もっとマシな事考えろ」

「・・・つい間違えて言ってしまった、かな？」

「自信ないみたいだけど、その通り違うから」

ため息を吐きたい衝動を抑える。

そういえば、翔とは初めて会ったときもため息を吐いていた。

一年前、高二の時に教室で前後の席になったのがきっかけで友達になった。今程ではないが、翔の軽さはすでに有名だった。初めは仲良くなれるなんて思っていなかった。耕平は女の子と付き合った事なんてないし、係とかで仲良くなった女子とたまに話すくらいしか女子との関わりなんてなかつたから、翔の事なんて全く理解できなかった。

「俺、元木翔。よろしくな西野」

「おお。まあ、よろしく」

失礼な話だが、耕平はこの後ため息を吐いた。翔に非があった訳ではないのだが、これからの事を考えてうまくやっていけるか考えたら思わず出てしまったのだ。

思っていたより大きな声が出て、翔にも聞こえてしまった。やべっと思わず手を口に当てると後ろから翔の笑い声が聞こえてきた。

「ははっ、まあ俺こんなだからため息吐くのも分かるよ」

「悪い。怒ってねえのか？」

「いい気分はしないけどね。仕方ないんじゃない？」

この時悪い奴じゃないんだろうって思った。普通ため息付かれたら怒るのに翔は笑って、フォローまでしてくれたから。

それからずっと友達だ。何考えてるのか分かんない事の方が多くけど、本当は良い奴だから。周りの奴が何を言っても、翔とは友達でいると思う。でも、できたら周りの奴にも女たらし以外の翔を知ってほしい。そしたら皆も翔と友達になりたいと思うはずだから。

「あゝっ分かんねえ！俺聞いてくる」

「は？」

思わず懐かしい光景に浸っていた耕平だが、翔の声で現実に戻る。考えても分からなかったので、直接本人に聞きに行くらしい。

「耕平くんも来る？」

「何だよ。行かねえよ。あ、そう言えばお前誰に振られたの？」

「D組の小黒 麻奈」

「あー、あの美人な子？」

「そ。超美人。俺程じゃないけど」

時々話しに出てくるので名前だけは知っている。実際に見た事はない。

「じゃあ俺言ってくる。長くなるかもしれないから先帰ってていいよ」

「そうか？じゃあな。あんまり失礼な事言つなよ」

「それは相手の態度によるね」

笑顔の翔に無言で手を振って耕平は教室を出た。

二、一目惚れ

翔に振られた理由が何だったのか聞いてみたが、教えてくれなかった。

正確には分からなかったらしい。翔の事だから聞き出せなかったという事はないと思う。

特別に振った理由はなかったという事なのだろうか。

でも翔ほど格好良い（認めたくないけど）男子に告白されて理由もなく振る女子なんているのだろうか。

憶測だけでは分からない事だった。

（気になるけど、執拗に調べて良い事でもねえよな）

一日中この事を考えていたら、何だか早く終わってしまった。

耕平はバスに乗り込む。

耕平の学校でこのバスを利用する生徒は学年で五人くらいしかないのだが、一般客で車内は混雑していた。何とか手前の二人掛けの席に座れた。まだ隣は誰もいない。

（何とか座れた。乗ってる時間長いからなあ）

妙な達成感を覚えながら、肩に掛けていた鞆を下に置いた。

「あ、すいません」

声に顔を上げると、同じ学校の制服を着た女の子が困った顔で見ていた。

隣に座りたいようだが彼女の鞆も大きいため、耕平の鞆が邪魔らしい。

「あ、悪い悪い！今どけるから」

慌てて鞆を横ではなくて縦向きに置きなおす。

「ふふっ、ありがとう」

慌てる耕平を面白そうに笑う。単純に可愛いなあと思ってしまった。女の子は少し遠慮がちに腰かけた。そして鞆を下ろす。

「あっ」

鞆に書いてある名前を見て耕平は声を上げた。

” 小黒 麻奈 ” っ て書いてあったから。

当然麻奈は何の事だか分からないだろうから、怪訝に思うだろう。案の定こっちを見ている。

しまったと思うが、もう遅い。耕平はこのまま黙れる程太い神経の持ち主ではなかった。

「ごめん。友達から小黒さんの話聞いた事あって」

できるだけ愛想の良い笑顔を作った。心の中で引きつっていない事を願う。

麻奈の表情は怪訝なままだ。仕方ないので翔の事も話す事にした。今の状況を麻奈の立場で考えたら不気味だろうから。

「元木翔って、昨日迷惑かけただろ？俺アイツの友達。翔って滅多に振られないから、小黒さんの事印象に残っちゃって」

ようやく納得してくれたようで、麻奈の表情から警戒の色が消えた。

耕平は安心してホッと息をついた。何だか麻奈に嫌われなくなかった。

「驚いたよな、ごめんな」

「ううん。そつか、元木君の友達だったんだ。あ、じゃあ私って印象悪いかな？」

「そんな事ねえよ！たまに振られた方があいつの為にもなるし、うん。むしろ感謝してるくらいだから！」

声が車内に響いた。

「そつか、良かった」

麻奈は安心したように微笑んだ。やっぱり可愛い。

「元木君、昨日初めて喋ったの。好きって言うてもらえるのは嬉しいけど、付き合えなかったわ」

「それが翔を振った理由なのか？」

「ん、そうかな。それに付き合ってたなら自分の好きな人がいいな」

「うん、そうだよな。良く女子は翔の顔とかカリスマ性だけで付き合っちゃうけどよ」

「確かに元木君人気あるものね」

「ナルシだけどな」

「あはは、そうかも」

麻奈が笑うので耕平も楽しくなって笑ってしまった。

それから教師の噂話や、テレビの話で盛り上がり、すっかり打ち解けた。

女子とこんなに自然体で話すのは初めてで、自分でも不思議に感じた。

彼女と話して分かったのだが、耕平の家と麻奈の家は割りと近くにあるらしい。

耕平の家は終点の一つ前で、麻奈の家は終点の近く。歩いて三十分くらいの距離だ。

「今まで会った事なかったのが、すごいよな」

「そうだね。あつ、耕平君ここ降りる所じゃない？」

「わっ、本当だ。すいませーん、もう一人降りまーす！じゃあな小黑」

「ん、バイバイ。また学校でね」

一回閉じたドアを開けてくれた運転手さんにお礼を言いながら慌ててバスを降りた。

振り返ると、麻奈が中から手を振っているのが見えた。

慌てて振り返すがバスが発したので見えていたか分からない。

家に帰るまで、今日の麻奈との会話を思い出していた。

（・・・何か、好きかもしんねえ）

自分の気持ちに素直な耕平がこの想いを確信するのに時間は掛からなかった。

三、幸せのような

放課後、校内にあるラウンジで翔は遅い昼食を食べていた。付き合わされた耕平は紙パックのココアを買って飲んでいる。

「何でお前は昼食の時間を逃すんだよ」

「それが起きたら五時間目始まってたんだよねー。もうびっくり」

翔は三時間目からずっと寝ていたらしい。昼食時の騒がしさにも起きなかったというのだからすごい。

「どんだけ眠いんだよ」

「まー良いじゃん。寝る子は育つって言うんだから」

翔のラーメンが残り三分の一くらいになった頃、ラウンジに五、六人の女子の集団が入ってきた。

その中の一人が耕平を見て手を振った。

「小黒！」

名前を呼ばれた麻奈が嬉しそうに近づいてくる。

「耕平君、今昼食なの？」

「いや、翔が寝てて昼食えなかったって言うからさ。俺はつき合わされてるだけ」

「そうなの？あ、友達が呼んでる。じゃあまた。・・・元木君も」

麻奈は集団の方に戻っていった。

二人が喋ってる間、翔はラーメンも食べずに交互に二人を見ていた。

「耕平クンと小黑 麻奈って知り合いだった？」

「昨日、初めて話したんだよ。帰りのバスが同じで、話したら何か良い奴だったぜ」

「へえー。良い奴、ねえ」

「何か可愛いしよ。俺好きかもしれない」

遠くに数人の友達に囲まれて笑う麻奈の姿が見える。

「告白・・・しようかな」

翔は目を見開いて耕平を見る。

その目はとても輝いていて、本気で麻奈が好きなんだろうと思った。

耕平の性格は熱くなりやすくて、一直線。

近いうちに本当に告白するだろう。

翔は誰にも気付かれず、ため息を吐いた。

それから二週間経った。

耕平と麻奈は前より随分仲良くなっていたが、まだ告白はしていなかった。

いざ告白しようと思うとやはり難しい。

「翔、お前いつもどうやって告白してんの？」

「やだなあ。人にそんな事聞いて。自分で考えなきゃ」

笑顔で拒否された。最近はいつも告白している翔がすごい人に思える。

教室を出ると少し前に麻奈の姿があった。声を掛けて一緒に帰る事になった。

バスの中の会話は相変わらず楽しく、どんどん想いが強くなっていくのを感じた。

「耕平君、次の停留所だね」

「あ、俺今日終点まで行くんだ」

「そうなの？じゃあもつと話せるね」

本当に嬉しい事を言う。

もちろん終点の場所に用事がある訳ではない。

勢いで言ってしまった事だったがさっきの麻奈の一言に耕平は決心をつけた。

終点についた。バスを降りると耕平の家の周りと似た風景があった。

緊張しているはずなのにやっぱり近所なんだとのんきに思ってしまった。

「そう言えばどうして此处で降りたの？」

「うん。小黒に言いたい事あつてさ。ちょっと良いか？」

「ん、いいよ。何？」

耕平は下を向いて、無造作に髪をかいた。
ばれない様に深呼吸して、顔を上げた。

「俺、小黒の事相当好きだ」

翌日、二人は手を繋いで登校して来た。

(・・・思い通りにいかないもんだな)

ある者の思いとは裏腹に。

四、夢

耕平と麻奈が付き合うようになってから一週間。誰から見ても幸せに見えたし、耕平自身も幸せだった。毎日一緒に登校する二人が今や当たり前になっていた。

「麻奈、今日一緒に帰れるか？」

「ん。一緒に帰ろう」

今傍ににいるのに、次の約束をする。まだ誰も言った事はないが、二人は充分なバカップルだ。

「耕平くん、おはよう。小黑さんも」

「お、翔。早いな」

「まあね。ちょっと話あんだけど良い？」

「ああ。別にいいけど」

耕平は麻奈と別れて、翔に連れられて中庭まで行った。

昼食時は混む中庭も朝だと大分人は少なかった。

二人は近くのベンチに座った。

翔の話は何なのか、それも気になるのだが耕平はフと思った事を聞いてみた。

「お前最近、女子と付き合っていないよな。麻奈に振られてからか？」

「まあ、もつと重大な問題があつてね。それどころじゃないわけ」

「お前もさ、本気で好きな奴と付き合えよ」

「耕平くん幸せそうだもんね」

「へへっ、それが麻奈の奴さ」

「うんもつ分かった。気持ち悪いくらい甘い話をありがとう」

麻奈の可愛い話をしてやろうと思ったなら笑顔で断られた。

翔の話は一時間目にやる数学のプリントを何枚か失くしたからコピーさせてくれと言う事だった。

どのプリントが無いのか確認したり結構大変だった。別に教室でもいいじゃないかと思ったが「別に中庭でも良いじゃん」と言われてそれもそうかと思った。それに翔が変なのは今に始まった事ではないので特に気にしなかった。

放課後、耕平は翔を呼びに教室に行ったが翔はいなかった。

本当は麻奈と帰るはずだったが休み時間に帰れなくなったと謝られてしまったので、久しぶりに電車を使って翔と帰ろうと考えての事だった。

（いねえのか。じゃあ一人で帰るか）

他にも同じ方向の友人はいたがちよつと一緒に帰るだけで誘うのも面倒くさいと思い、一人廊下を歩いた。

「耕平、今日は小黒と一緒にじゃねえのか？」

二階から一階へと階段を下りていると、級友の岡村に声を掛けられた。

級友の隣には違う教室の女子がついている。そういえば二人って付き合ってるんだっけ。

「おう。何か用事あるみたいだよ」

「そうか」

そう言うとき女子が小声で何かを言った。
何を言ったか分からないが、岡村が顔を曇らせた。
嫌な予感がする。

「え、マジかよ？」

「う、ん。言った方が良くないんじゃない？」

「おい耕平。小黒の用事って何か知ってるのか？」

「いや。知らねえけど」

「あの、麻奈さつき元木君に呼ばれて、中庭に行つたみたいなんだけど」

「・・・マジで？」

耕平はそのまま中庭に走った。

別に翔と麻奈を疑ってるわけではないけど、女子が嘘をついているようには思えなかった。

途中何度か転びそうになったがとにかく走った。

ここから中庭はそんなに遠くないのですぐについた。

中庭につくと、中から翔が出てきた。

「翔！」

「あら耕平くん」

「お前、麻奈と一緒にいたのか？」

女子の誤解であってほしいと思う。

「ああ、ついさっきまでね。耕平くんまだ帰ってなかったの？」

あっさり悪びれもなく言われたしまった。
とてつもなく腹が立った。

「何で一緒にいるんだよ?!」

「んゝ、俺が小黒を呼び出したから」

「はあっ？」

「ちょっとお話したくて。別に耕平くんと言わなきゃいけない事じゃないでしょ？」

「そりゃ、そうだけど。でもなつ、俺と麻奈は付き合ってたし、
・ ・ ・ そういう事されるとム力つく」

「まーまー、やましい事なんてしてないから。こんなに人がいたら
できないしね」

「お前つ・ ・ ・」

「小黒は教室戻ったよ。今から行けば間に合うんじゃない？じゃあ
俺は用事があるから、またね」

翔はポケットに手をつ突っ込んで走っていった。
残された耕平は、去っていく翔の姿をただ見つめる事しかできなかった。

麻奈もどうして翔と会うことを言わなかったのだろう。
やましい事はしてないなんて言われても、信じられるわけがない。
耕平はその場に座り込んだ。

五、小黒 麻奈

翔は最近女の子と付き合わない。

理由は耕平に言ったとおり、もっと重要な問題ができたから。

翔は自室のベッドに寝転がった。

目を閉じて思い出すのは、麻奈に振られたあの日の事。

耕平と別れた後、麻奈の教室へ行った。

麻奈は数人の女友達に囲まれていた。楽しそうに笑っていたけど、何だか違和感を感じた。

しばらく見ていたら一人の女子が気付いて手を振ってきた。別に親しくもない奴。

愛想の良い笑顔で適当に振り返した。そして麻奈の元へ近づく。

「小黒 麻奈さん。ちょっと話があるんだけど来てくれる？」

自分からすれば此処でも良かったのだが、麻奈の事を考えて中庭でも行こうと思った。

麻奈は嫌がるかと思ったらすんなり来てくれた。

中庭で麻奈はベンチに座り、翔は距離をあけて近くの石段に腰掛けた。

「それで、話って何？告白なら断ったはずだけど」

「うん。別にも一回口説こうってわけじゃないから、安心して」

「そしたらまた振るだけだね」

笑顔で嫌味を言ってみたら、言い返されてしまった。何か告白した時と雰囲気が違う。

それでも翔は笑顔を崩す事なく喋る。

「俺さ、振られたの初めてなんだよね」

「らしいね。どうして振られなかったのか不思議だな」

「ははっ、俺の魅力が分からないなんて可哀想な子だね」

麻奈の態度は明らかに今までと違う。

「小黒ってそんな人だったけ？友達の前と性格違うね」

「当たり前じゃない。猫かぶってるんだから」

「俺にそんな事言っちゃって良いの？皆にバラすかもよ」

本当にバラす気はない。麻奈の事なんてどうでも良かったから。少し麻奈を試してみたくて言ってみた。

「バラさないわよ。元木君は」

「あ、そ。つまんないの」

麻奈は馬鹿にしたように翔を見た。
からかいがないの相手がということが分かった翔はそれ以上は言わない。

「まあいいや。俺を振った理由、教えて」

「あなたが嫌いだから」

「わあ、キツイなあ。それだけ？」

「後は、好きな人がいるから」

「へえ」

普通は好きな人の話って皆食い付くんだろうけど、どうでも良かった。

「教えてあげようか？」

「教えたいならどうぞ」

もう行こうと思って石段から腰を上げていた。
聞くだけなら良いかと思って麻奈を見ると、今まで見たことない程の笑顔をしていた。

「小黒 麻奈。私自身」

「・・・フザケてんの？」

何の冗談だ、面白くも無い。そう思った。
だけど麻奈は本気だった。

「本気よ。私は私が好きな。私は両思いよ」

真剣な口調と目。翔は寒気が走るのを感じた。

「自分を愛してるの。自分以外誰も愛せない」

「・・・変な子だね」

「変？そうかな？」

麻奈はベンチから立ち上がった。

「話は終わり。じゃあね、翔君」

「名前で呼ばないで」

麻奈は残念だなと笑った。それが本当の笑いかどうかは分からなかった。

立ち去ろうとする麻奈に思った事を言ってみる。

「ちょっと良い？自分しか愛せないんだよね。じゃあ何で友達と一緒にいんの？」

「孤独な自分より、人気者の自分が好きだから。自分のステータスのため、かな」

「なるほどね。じゃあ俺を振った事でステータス上がったんじゃない？」

「自意識過剰よ。まあ否定はしないけど」

今思い出しても嫌な気分になる。

耕平と麻奈が付き合うのはどうにかして防ぎたかったが、できなかった。

麻奈は耕平の事を好きなのではない。

もしそれを耕平が知ったらどう思うんだろう。きっと傷つく。

耕平は自分にとって大切な友達だから、そんなの見てられない。自分にできる事は何だろう。

翔はかけ布団を頭まで伸ばした。

自分にはしたい事が他にあるけど、今はこれが一番重要な事。

六、悪者になる

翔が自分にできる事として考えたのは、耕平が真実を知らない内に麻奈と別れる事。

悪者になっても良いから二人を別れさせようと思うのだ。

決断するまで随分時間が掛かった。耕平からすれば幸せを失うわけだし。嫌われるのは怖い。

今でも正しい事なのかは分からずにいる。

翔は麻奈と二人で良く会うようになった。勿論耕平に内緒で。人伝いで耕平に知られるように巧妙に仕組んだ。

その間の麻奈との会話はほとんど麻奈が話している。

適当に聞いていたから、何を話していたかは覚えていない。

どうせ本当の気持ちのない言葉だろうから聞いても意味はない。

段々に耕平とは険悪になっていった。それは思っていたより辛かった。

遂に七回目、耕平が本気で怒った。

怒りの矛先は翔だけに向いた。

「いい加減にしろよ。お前何なんだよ。マジ見損なったわ」

「・・・」

言い返せなかった。それより自分がとんだ計算違いをしていた事に気付いた。

麻奈は状況を読みうまく怒りから逃れ、翔が耕平の彼女にちょっかいを出したという事になってしまったのだ。

「もうマジ顔も見たくないから。じゃあな・・・元木」

耕平と麻奈は別れる事はなく、耕平は翔と友達をやめた。

（最悪・・・俺何してんだろ）

後悔した。自分のしたことを。本当に悪者になってしまった。

帰りの駅のホーム、翔は最悪の気分で電車を待っていた。

耕平に絶交を告げられた後、教室でボーっとしていたら遅くなってしまった。

周りには同じ制服の姿は見えない。いない方が良いのだが。

フと改札の方を見ると、一番会いたくない奴が入ってくるのが見えた。

翔の元へ近づいてきた。

「あんたバスなんじゃないの？」

「いいじゃない。電車からでも帰れるのよ」

麻奈は翔の横に並んだ。

「耕平は？一緒に帰るんじゃないの？」

「今日は一人で帰りたいって言ったの」

「じゃあ俺の傍来ないでよ」

「元木君って馬鹿だよ。別れさせたいなら本当の私の事を言えればいいじゃない」

確かに自分の事は馬鹿だと思う。

「それ言ったら耕平傷つくでしょ？まあ自分しか愛せない人には分かんない？」

「でも元木君が耕平君から私を奪っても傷つくんじゃない？」

「耕平があんたの事嫌いになれば良いと思ったよ。うまくいかなかったけど」

「そうね」

電車が来た。始発だから空いている。翔と麻奈は一人分空けて座った。

「元木君、まだ耕平君の事好き？」

「好きだよ。友達としてね」

「耕平君の事を思ってたやって、それで酷い事言われたのに？」

「そうだよ。俺が嫌いなのはあんた」

「いいわよ別に。私は私がいれば良いもの」

そのままお互い何も話さなくなった。

翔は少し言い過ぎた気もしたが、謝らなかった。

次の駅で麻奈は降りた。もっと遠いと思っていたから少し意外だった。

「じゃあね、元木君」

「・・・バイバイ」

電車の窓から見た麻奈が泣きそうな表情をしていたのは気のせいではないと思う。

だけど、翔は見なかった事にした。

七、LOVE MYSELF

自分を愛している。

それはそんなに可笑しい事なのだろうか。

苦しい時、嬉しい時、寂しい時、悲しい時、感動した時にいつも必ず傍にるのは自分自身。

それを好きになるのは必然、当たり前。

麻奈はどうして周りの人が自分自身を愛さないのか不思議でならなかった。

元から容姿は良かったから、あとは明るく親切にしていればすぐに友達は増えた。

人気者という地位を得た。

あとは付き合っているという肩書きがほしかった。

自分からではなく相手から告白されるという形で。

しかしハードルが高いと思われ、告白される事はなかった。

そこに元木 翔、格好良くて女たらしの彼が告白してきた。

自信があったのだらう。断った時はすごく驚いていた。

翔が不満だったわけじゃない。付き合ったら自分だけを見させる自信もあった。

でも翔だけはどうしても嫌だった。理由を翔に教える気はないが。

良いタイミングで翔の友達の耕平と出会った。

見かけも中々格好良かったので付き合う事にした。

勿論自分のステータスを上げるために。

自分の考えが間違っているなんて思っていなかったし、このまま輝

かしい自分が続くんだらうと疑わなかった。

今日は久しぶりに友達と帰る事にした。教室に待たせている。
ドアを開けようとした。

「ねー麻奈ってさ、調子乗ってるよね」

さっきまで一緒に笑っていた女子が自分の悪口を言っている。
ドアを開くのをやめ、次の言葉を待つ。

「あたしも思ってた。あの子いつも馬鹿にした目で見てるよね」

「うちが相談した時も、全然聞いてくれなかった」

「最悪じゃん」

「ねえ、明日から麻奈無視しない？」

自分の手が震えているのが分かった。

直接言わない彼女達に腹が立つ。でも間違った事は言っていなかった。

（だって、あなた達馬鹿じゃない。馬鹿を馬鹿にして何が悪いの？
相談、何で私が乗らなきゃいけないのよ。自分でどうにかしなさい
よ）

「あゝあ、女子って怖いねー」

翔がひよっこり顔を出した。麻奈は翔がいた事に気付かなかった。

「あの様子だと本当に無視されるぞ。女子ってやる事陰険だから」

「別に。私は私がいれば良いのよ。あの子達なんかより、もっとレベルの高い人達と付き合えば良いんだし」

「レベルが高いって何？自分がその友達の事好きならそれで良いんじゃない？」

「・・・あの子達なんか好きじゃない。私は自分が好きなの」

「へえ。で、どうすんの？教室入ったら、笑顔でおかえりって言われるだろうね」

「白々しいけど、鞆があるもの」

「分かった。じゃあ俺はこれで」

行こうとする翔を麻奈は腕を掴んで引き止める。大声を出すと教室の中に聞こえてしまうかもしれないから。

「待つて。耕平君には言わないで」

翔は一瞬きょんとして、悲しそうに笑った。

「耕平はもう俺となんて話してくれないよ」

翔の言葉を聞いたとき少しだけ、本当に少しだけ胸が痛くなった。自分のせいで二人は友達でなくなってしまったんだ。

教室に入ると、笑顔で「お帰り」「待つてたよ」と言われた。

嘘だという事は分かっているのに、嬉しくなった。
そして明日が怖くなった。他人なんかどうでも良いはずなのに。

八、探す

耕平以外の親しい友達なんていなかったから、翔は一人になった。休み時間に話したりする奴はいるけど、友達とは思えなかった。

思い出してみれば高校生活のほとんどの時間は耕平といるか、不特定多数の女の子と過ごした。

別に女の子が大好きってわけじゃない。勿論嫌いではないんだけど。翔が色々な女の子と付き合うのは、探してる人があるから。

この学校にいるのか、年齢は何歳なのかも分からない。でもどうしてももう一度会いたいから。

小さい頃、親の用事で翔は親戚のいるこの町に二日だけ預けられた。六歳だった翔は親戚が目を離れた隙に外に飛び出した。

そしてすぐに迷子になった。四時間以上迷ってもう駄目だと思って公園のブランコい座り込んだ。

せめて死ぬ前にブランコをこごうと思ったのだが、段々落ちていく太陽に気持ちが高ぶってしまい泣きだしたのだ。

そんな時に不思議そうに見てくる女の子がいた。

「どうしたの？男の子なんだから泣かないの」

そして近くの交番まで連れて行ってもらったのだ。

何とも格好悪い記憶なのだが、忘れる事はなかった。

いつか大きくなったら、今度は自分がその女の子を助けようと思った。

名前も年齢も何も知らない。顔もきつと変わってる。

相手が自分と再会しても分からないだろう。
だけど絶対見つける。自分が分かってやる。そう思った。

それから色々な女の子と付き合ったが、あの子ではなかった。
そしていつの間にか女たらしと言われるようになって、友達もでき
なかった。

唯一仲良くなったのが耕平。

しかし今耕平はいない。

あの女の子を探す。

翔の思いは更に強くなった。

でもそれ以上に明日から無視されるであろう麻奈が気になった。

九、気になるから

昼食はたまに耕平と食べるか一人で食べていた。

最近はずっと一人。食べるだけなら別に一人で良いんだけど、周りの楽しそうな声が聞こえると寂しい気持ちになる。だから一人の時は誰もいない屋上に行く。

翔はそうやって自分を守るけど麻奈は一人で食べるなんて初めてだろう。

耕平と食べるのかもしれないけど耕平はたくさんの男友達に囲まれているから、きっと誘いにくい。

（仕方ない、行ってみよう）

翔は弁当と屋上の鍵をもって麻奈のいる教室へ向かった。

麻奈は一人で席に座って、弁当を食べるでもなくボーっとしていた。教室に入ると何人かの女子から声を掛けられた。

翔は適当に笑って頷き、麻奈の席に近づく。

「一緒に弁当食わない？」

嫌味な程に笑って言うてみた。なんとなく恥ずかしかったから、照れ隠しに。

麻奈は驚いた顔で見ている。そりゃそうだと思う。断るかもしれない。

「ん、一緒に食べたい」

麻奈が恥ずかしそうに小さな声で言うから、翔までもっと恥ずかしくなった。

早く行こうと急かすように翔は教室を出た。
屋上は立ち入り禁止という事で、誰もいなかった。

「何で鍵もってるの？」

さつきから黙りっぱなしだった麻奈が尋ねた。

喋ってくれた事に喜びと安心を感じながら、話してやる。

「大掃除で鍵もらった時から、ずっと借りてんの」

ちなみにこれは当時掃除当番だった奴しか知らない。

翔がじゃんけんに勝って所有権を手にしたのだ。

「それって駄目なんじゃ」

「いいのいいの」

翔の様子に麻奈が苦笑した。苦笑でも笑ってくれて良かったと思う。
二人で屋上の真ん中に座って弁当を広げた。

「本当に真ん中だね」

「どうせならね」

しばらく黙々と箸を進めた。

「ねえ、何で元木君は私を誘ってくれたの？」

「俺も食う奴いないからね。だったら一人同士が集まって食った方がいいじゃん」

麻奈は黙ってしまった。

何か拙い事でも言ってしまったかと不安になるが、そうではないよ
うだ。

「無視されるって結構辛いね。今日は参ったよ」

「そっか」

「ん。他人何かどうでも良いと思ってたけど違った」

「まあな」

「でも、私はやっぱり私しか愛せない。でも前みたいにステータス
だなんて思うのはやめる」

「そうだな。それに友達って必要だよ」

「・・・でも私は自分が好きだよ」

「今は、ステータスじゃないって分かっただけで良いよ」

「ん、ありがとう」

まさか麻奈とこんな話をするようになるなんて思わなかった。

今流れてる時間はとても穏やかだからこれも良いのかな、なんて考
えた。

だけど耕平の顔が浮かんで、本当は誘うべきではなかったと後悔す
るのだった。

翌日、昼の時間になった。

翔は教室で麻奈を誘おうか迷っていた。

ちよつと前までだったら、耕平の事を考えてやめていただろう。でも何だか麻奈が気になるのだ。

同情だけじゃない、自分が麻奈の傍にいたいと思う。

（はぁ、どうしょ）

「おい翔、小黑さんが呼んでる」

級友の声に振り向いて見れば、教室に端に麻奈が弁当を持って立っていた。

その時、耕平の顔が浮かんだけど、麻奈の元へ走っていた。

十、愛せない

翔と麻奈が一緒に弁当を食べているのはすぐに広まって、耕平の耳にも届いた。

あれからすっかり大人しくなった麻奈は耕平に本当の事を告げたいと言う。

翔にも今はそれが一番良い事に思えた。

どんなに辛くても、いつかは知る事になる真実なら早い方が良くだろう。

麻奈は屋上に耕平を呼びたいそうだ。そういう事なら翔は鍵を貸した。

聞いてはいけないとは思ったが、どうしても気になって翔は屋上に来てしまった。

昔作ったスピアの鍵を使った。

ばれない様に物陰に隠れる。罪悪感はあるが、いなきやいけない様な気もした。

しばらく待つと、耕平と麻奈が来た。姿は見えないけど、足音で分かった。

「私、これ以上耕平君と付き合えない。ごめんなさい」

「・・・翔が好きだからか？」

「・・・私ね、自分以外愛せないの。耕平君と付き合ったのは、自分のステータスを上げるため」

「・・・っ」

「元木君はそれに気付いてわざと耕平君と私を別れさせようとしたの。耕平君のために」

何言ってるんだ。そんな余計な事言わなくていい。翔は二人の方を覗き込んだ。

耕平も麻奈も俯いて下を見ている。麻奈は泣きそうだ。

翔は胸がしめつけられるような思いがした。

「だから、元木君とは仲直りして。私の事は無視してくれて構わないから」

「・・・何で俺じゃ駄目なんだよ。俺麻奈の事好きだ。麻奈も俺の事好きになって欲しい」

「ごめんっ。本当にごめん。でも誰も愛せない」

「俺は・・・愛して欲しい」

翔は耳を塞ぎたくなった。

耕平の想いも、麻奈の想いも充分すぎる程伝わってくるから。

「頼むから、好きになっ、て」

「・・・ごめんっなさい。誰も、愛せない」

遂に麻奈は泣いてしまった。崩れるようにしゃがみこんだ。翔は見てられなくなり、二人の前に飛び出した。

「元木君っ？」

「翔っ……」

耕平は逃げるように屋上を出て行った。

翔は追いかけてよとしたが、今は泣き崩れている麻奈が先だと思い直す。

「小黒」

「元木、君。どうしよう。でも、私、愛せない」

「分かった、分かったから落ち着いて」

「でも、耕平君、愛せなかった、傷つけた。私、愛せない」

「……麻奈、愛せないなんて言わないで」

「愛せない、誰も。ごめん、なさい」

「俺は麻奈が好きだよ。俺を、愛して」

「！」

夕日が照らす中、二つの影が重なった。

「今すぐじゃなくて良いから、俺の傍にいて、ゆっくり好きになつて」

麻奈は泣きながらその時確かに頷いた。

十一、友情

翌日、耕平は学校を休んだ。

翔は耕平の家へ行く事にした。

麻奈も行きたいと言ったのだが耕平の気持ちを考え、翔一人で行くことにした。

前に何回か行った事があるので家に行くのは大変な事ではなかった。しかしいざチャイムを押そうと思うと、中々押せない。しばらく家の前で葛藤していると、ドアが開かれた。

「人ん家の前で何してんだよ。窓から見えてたぞ」

耕平が呆れたように笑いながら顔を出した。

「耕平くん、仮病？」

「メンタル面の問題。まあ上がれよ」。

リビングでカルピスを出された。

少し味が濃いなと思った。

耕平が怒っていないようで翔は安心した。

「悪かったな。その、お前の事見損なったと言っちゃまって」

「ほんとだね。俺がどんなに傷ついたか」

「・・・ごめんって。調子良いと思うんだけどさ、また友達でいて欲しい」

いつもと違って耕平は大人しかった。

もう少しからかってやるうかと思ったが可哀想なのでやめた。

「別に俺友達やめたつもりないから、そんなの言わなくて良いよ」

「・・・そつか。ありがとな」

「いえいえ。それより俺も言いたい事あるんだよね」

耕平は元気を取り戻したようで、カルピスを飲んでいた。

「分かっていると思うけど、麻奈の事ね」

「おう。俺も麻奈の事で言いたい事があるんだ。先言つて良いか？」

「良いよ」

「麻奈、誰も愛せないって言ってたけどさ、翔の事好きだと思うぜ」

「・・・耕平くんは麻奈の事はもう良いの？」

「俺さ、好きだとか言いながら麻奈が無視されてる事全然知らなかったんだぜ。それに、麻奈結構悩んでたと思うんだ。俺、麻奈好きだけど、これからは友達として付き合って行こうと思う。もし、お前が麻奈を好きなら、付き合っただけいい」

翔はにっこり笑った。

「任しといて。麻奈は絶対幸せにするよ」

十二、LOVE YOU

あれから半年が過ぎ、季節は冬に変わった。

麻奈の根本的は考え方が変わった事で、友達に対する態度も変わった。

無視されていた友達とは、前の様にはいかないが改めて仲良くなった。

翔も色々な女の子と付き合う事がなくなり男の友達が出来た。勿論一番仲が良いのは耕平だが。そして探していた女の子とは意外な形で再開する事になった。

それは翔と麻奈が付き合い始めて二ヶ月後の事。

「翔君ってどうしてたくさんの女の子と付き合ってたの？」

「俺六歳の時に迷子になって、その時に交番に連れて行ってくれた子がいてね。その子を探してた」

「見つかった？」

「駄目だった。相手が分からなくても俺が分かってやるって思ってたんだけど、分かんなかった」

「あのね。その女の子、多分私」

「え、マジ？本当に？」

「翔君覚えてないと思うけど、あの時名札つけてたのよ。元木し
ようって書いてあって」

麻奈は思い出したかのように笑い出した。

「男のくせに迷子で泣いてるなんて言うから、面白くて。それから
ずっと覚えてたなあ」

「うわあ、最悪。俺ダサいね」

「大丈夫。すごく面白かったから」

麻奈とはすっかり冗談の言える関係になった。

時々本当に腹が立つような事も言うけど、麻奈だから許す。

「私が最初、翔君を振った理由ってもう一つあったんだよ」

「そうなの？」

「ん。私前はステータスだって言ってたでしょ。でも翔君があの時
のしょう君だって分かったから、翔君はステータスにしくなかつ
た」

「それが断った理由？」

「そう。それにもし翔君じゃなかったら、自分しか愛せないなんて
事言わなかった。もしかしたら私も昔から翔君の事好きだったのか
もしれない」

最近は昼食は三人で食べている。
翔と耕平と一緒に。場所は屋上。

「冬、普通に屋上さみいよ」

「耕平くん帰っても良いんだよ？俺と麻奈でラブラブに過ごすから」

「ふふふ、そうだね」

「お前ら容赦ねえな」

「あははは」

ちよつとした事が本当に面白くて笑う。
半年前の自分では考えられなかった。

「あー、俺も彼女が欲しい。そこでこいつらに見せ付けてやりたい」

「別に俺は麻奈がいるから羨ましくないよ。ね、麻奈」

「ん、翔がいるから私も羨ましくないよ」

「今に見てろ、俺もお前らみたいに人前でのろけてやるから」

「ははっ。でもさ、耕平君に彼女が出来ても一緒に四人で食べようね」

「おう。俺の彼女に期待してろ」

「じゃあ卒業するまでに彼女作らなきゃね。耕平くん」

「あと三ヶ月・・・俺やバイかも」

空を見上げると、雲一つない綺麗な青空があった。
横を見ると騒いでいる二人の姿。

めんと向かつては言えないけど。

（二人とも、大好きだよ）

私も、自分以外の人を愛する事ができました。

番外編、出会う日のために（前書き）

しょうと麻奈が公園で出会った時の話。

番外編、出会う日のために

麻奈は自分の家が好きじゃなかった。

お父さんもお母さんも、麻奈のことを好きじゃないから。

同じ幼稚園の子が普通に感じているような「愛されている」「っていう感覚が

どんなものなのか分からなかった。

きつと妹が普段感じているような感覚なんだろうと思う。

麻奈は自分の部屋で一人で鏡を見ていた。

長いまつ毛。漆黒の大きな目。綺麗な二重。すっとした鼻。

笑うと小さな弧を描く唇。白い、ふくらんだ頬。

（・・・何が駄目なんだろう）

ちよつと前までは自分の顔も嫌いで仕方なかったけど。

今は鏡を見ていると気が紛れるから好きだ。

「麻奈ー。お夕飯食べに行くんだから、部屋から出てらっしゃい」

お母さんの呼ぶ声がした。

「はい」

リビングに下りると、よそ行きの格好をした妹が

母親に髪をおしゃれに結ってもらっているところだった。

「麻奈も外用の服に着替えなさい」

「ん、分かった」

お母さんはそれだけ言うと、妹の髪に視線を戻してしまった。

妹はたまに痛がったりしながら、幸せそうに笑っていた。

(・・・麻奈の方が髪長いから、色んな髪型出来るのにな)

麻奈はわざといつもの服に着替えた。

「麻奈、お前は相変わらず外用の服を着ないな」

お父さんが苦笑した。

外にお出かけするのは、家にいるよりは好きだ。

「ねえ見て。あの子可愛いー」

「目大きいー」

周りの視線は、おしゃれな髪型をした妹じゃなくて

普段着の麻奈の方にいつもそそがれる。

妹だって普通に可愛いが、麻奈は飛びぬけていた。

まだ六歳の子供なのに、将来は美人になるというのが分かる。

パーツがそれほど整っていた。

妹はまだ小さいから良く分かっていないのか、気にした様子はない。

「あの子可愛いねー」

「まつ毛すごい」

（やっぱり、私って可愛いんだ）

でも、お母さんやお父さんには、私より妹が可愛く見えるらしい。

でもきつと、見た目だけなら二人とも麻奈の方を可愛いと
思っていると思う

昔、夜中に二人が話しているのを聞いてしまった。

「麻奈は私達の子じゃない。枝里子と比べて、どうしても鼻屑してしまう」

「しかし、産まない方がお前の身体に負担がかかったんだ」

「でも、麻奈自体に罪は無いの。私が駄目なの」

「泣くなよ。お前のせいじゃない。親戚の誰かに、預かってもらえないか、聞いてみよう」

よく分からなかったけど、とても悲しかった。

やっぱり愛されてないんだと思った。

知らない人に「可愛い」と言われたって、意味はないと思っていたけれど。

少なくとも、自分の顔は好きになれた。

幼稚園のない日は、鏡を見て、時間を潰せるようになった。

麻奈は外出した時に、「可愛い」といわれる度に

もっと自分の顔が好きになれる気がしていた。

「枝里子ったら、またこんなもの拾って」

「なんだこれ。ビービーダンか。懐かしいなあ」

お父さんとお母さんは、妹に夢中だ。

春休みになった。4月になったら幼稚園ではなく小学校に行くのだ。麻奈はなるべく家から出て過ごすようにしていた。

友達と遊びたかったけど、親に言わないと

友達の家がどこか分からなかったので遊べなかった。

公園に行つて、その時いた人が仲間に入れてくれれば

その人達と遊んだ。

でも一人になつてしまつ日もたまにあった。

いつもの公園でさっきなつたばかりの友達と遊んでいた。

夕日が出ると、その友達の親が迎えに来てしまつて、帰つてしまつた。

「まなちゃん、ばいばーい！」

「ばいばい、あずさちゃん」

あずさちゃんとそのお母さんは手を繋ぎながら、角を曲がって見えなくなってしまった。

さつきまですごく楽しく遊んでいても、皆、麻奈より親の方が好きなのだ。

仕方のないことだけど、少し寂しかった。

（まだ帰りたくないな。・・・はげ公園に行ってみよう）

はげ公園には、はげた小さな山とブランコしかない。

ブランコも2つしかないの、あまり人気のない公園だった。

（誰もいないんだろーな）

公園に着くと、予想が外れて、男の子が一人。

ブランコの上で泣いていた。

「びいん。ひっく・・・ぶううつん」

”元木 しょう”と書いてある名札を服につけていた。

（しょう君かあ）

男の子なのに、人目を気にせず泣いている。

麻奈はあまり泣いたことが無い。

「どうしたの？男のなんだから、泣かないの」

「ひつく……。なんで男が泣いたらいけないんだ」

男の子の顔はびっくりする程綺麗だった。

泣き顔なのに綺麗だった。

鼻水が出てきそうなのを見て、麻奈は慌ててティッシュを渡した。

「鼻水出ちゃうよ。どうしたの？けんか？」

「けんかだったら負けねーよ。俺、強いもん」

「ふーん。じゃあどうしたの」

「迷子なんだよ！」

「え、迷子なの」

麻奈はポカーンとしてしまった。

こんな綺麗な少年が迷子で泣いているというが、何となくおかしかった。

自分にとっては住み慣れた街。

こんな簡単な場所をどう迷えるんだと思ってしまった。

「交番、近くにあるよ。そこに行ってみよう？そうしたらお母さんもくるよ」

「・・・ほんとかよ」

「ん、行く」

「・・・ありがとう」

しょうは泣き止んで、麻奈と一緒に歩き出した。

横に並ぶと、しょうは結構背が大きかった。

「お前、いいやつだな」

「別に。しょう君こそ、綺麗な顔だね」

「男が顔綺麗だって、意味ねーよ。男は強くなきゃいけないんだ」

（さっきまで迷子で泣いてたのにね）

麻奈はへへへと笑った。

しょうもニカッと笑った。

「もし、お前に何かあったら、今度は俺が助けてやるから」

「ほんとに?」

「おう」

「・・・私さ、顔は可愛いよね?」

「は?普通じゃね?」

(ガーン!)

「・・・でも、皆は可愛いっていうの」

「そうなの?ふーん。顔は普通だけど、優しいから、俺はお前の」と好き」

しょうは二カって笑った。

麻奈の中に温かいものが流れてくる気がした。

「でもね。お母さんとお父さんは、私のこと嫌いなんだ」

「・・・そうなのか」

「・・・うん。あ、交番着いたよ」

角を曲がると交番があった。

空を見ると夕日も沈んで、青くなっていった。

「私、家に帰るね」

「おう。ありがとな」

「ううん。ばいばい」

「またな」

そう言って片手を挙げてしょうは笑った。

しょうの笑顔は綺麗だった。

（また、会えたらいいな）

小さなときめきを抱えて、麻奈は家まで走った。

番外編、出会う日のために（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

「LOVE MYSELF」は3年前に書いた話です。

あの時は、安易に書きましたが

麻奈が屈折した性格になったのは、それなりの理由があったはずだ
と思います、

翔に惚れた理由も曖昧だったので、番外編という形で書きました。
思い入れのある作品なので書いて楽しかったです。

もし、3年前に読んで、また今読んで下さる方がいたら（いないと
思いますが・笑）
すごく幸せです。

翔のは、昔からモテモテだけど、今より漢キャラでした。

翔の性格が屈折したのは、ナルシストの翔の性格ゆえです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418a/>

LOVE MYSELF

2010年12月4日04時27分発行